

○司会（小原 勉） 続いて、三牧勉さんを紹介しします。

三牧さんは、1968 年に関西大学文学部史学科を卒業され、2 年後に速記界に転じた後、高槻市議会の速記者として長年活躍されるとともに、講談落語速記本、特に大阪にかかわりのある速記者について研究されてきました。

それでは、「速記本と大阪の速記人」というテーマで報告をお願いします。

~~~~~

### 3 「大阪の講談速記本の研究」 三牧 勉（日本速記協会）

三牧です。私に与えられた時間は余りございませんので、立て板にジェット機でしゃべるかもしれません。足りないところは、お配りしたレジュメを後で読んでいただいたら、何とかつかめるんじゃないかと思えます。

実は、この隣に慶応大学のポスターが張っており、『福翁<sup>ふくおう</sup>自伝』を読む会らしいです。この『福翁自伝』も、福沢諭吉が社長を務める時事新報の社員であった矢野由次郎という速記者が明治 30 年から翌年夏まで口述筆記をし、それに福澤が筆を入れて本にしたものなんです。

きょうの講演で速記関係者は私だけですので、速記の立場というか、速記の視点でお話ししますが、「大阪の速記本」というと、先ほど南陵先生から話があったように、丸山平次郎と山田都一郎、この 2 人に尽きると言っていぐらいです。本来なら圧倒的に作品の多い丸山平次郎についてお話しすべきでしょうが、どうもこの人は、まとも過ぎるといふか、人格円満で、こんなことを言うと速記者の皆さんにはお叱りを受けること必定ですが、速記者らしからぬ人なんです。それよりも、実は丸山は資料も少ないんです。そういうことで、もう一人の大立者である山田都一郎について、今回は時間を費やしたいと思えます。

というのは、先ほども南陵先生からお話のあった『女紋』という小説、これはテレビドラマになり、映画にもなり、結構話題になった本ですが、その中でただ一人、悪者扱いされて出てくるのが山田都一郎なんです。『女紋』の作者は実録という言い方をしていますが、南陵先生もご存じのように、ある意味では非常に脚色しているといふか、悪意に満ちた部分があります。それは、都一郎に速記をさせることで玉田玉秀齋の名前を売り、真打にしたいという野望が、玉秀齋と駆け落ちしたお敬にあり、そのために娘の寧まで都一郎と政略結婚させたわけですから、都一郎をよく書くことはないと思います。その辺も時間があればお話ししたいと思えます。

レジュメの年表で「山田都一郎」の項がありますが、これを中心にお話ししていきます。

明治 4 年 10 月 25 日の項を見てください。山田都一郎の実のお父さんは小林周造といい、明治維新のときに名君とうたわれた越前福井藩の松平慶永——春嶽の勘定奉行だった人で、京都へ維新政府の関係で来て、理由はわからないんですが、京の小松原で首を切られています。そのとき都一郎は、「ひろ」という周造の妻のおなかにいて、翌明治 5 年 2 月 1 日に生まれます。ただ、昔のことですから、お母さんは母方の家を出産してすぐに再婚し出ていきます。その関係で、祖父母の山田半平・ミキの次男として出生届が出され育てられます。加えて、明治 4 年には廃藩置県があり、武士は禄を失い武士階級は貧乏

になります。その意味では最初から不遇をかこった人と言えます。

一方、丸山平次郎は都一郎とは7つ違いですが、明治16年に上京し、田鎖綱紀の第3期講習会の卒業生として、2年後の明治18年、20歳のときに大阪に参ります。しかし、速記者には金持ちがいらないというか、大阪でも苦労したようで、仕方なく数日間で書いたと言われているんですが、『ことば乃寫眞法』という、日本初の速記独習書を書きます。すごく売れたそうで、各地で7種類の偽版が出たそうですが、出版社しかもうからない当時の版権のシステムがあり、生活には何の潤いもなかったという話です。それで四国丸亀などに転居して速記の教授をするなど、苦労をします。

年表の写真は、今夏亡くなった竹島茂さんの『舞台裏の現代史』から拝借したのですが、明治34年の田鎖、丸山、山田が写っています。見たとおりで、右の丸山はしっかりした顔をしています。左の山田は、ちょっと首をかしげ、見るからになよなよしており、そんなに悪い男には見えませんが、『女紋』の評価もいたし方ない気がします。

年表2枚目の左に『ことば乃寫眞法』の写真、右側に若林<sup>かんぞう</sup>珪蔵と酒井昇造の写真を載せていますが、初の速記本『怪談牡丹<sup>どうろう</sup>燈籠』や丸山の速記本などについては詳しく触れる時間ありませんので、次に移ります。

山田都一郎は、明治21年、16歳で大阪に来て、大阪に講習で来た田鎖に学び、その講習がぼしゃって名古屋に行く田鎖について行って勉強し、明治23年に大阪に帰ってきます。南陵先生の著書によると、この年の9月に『改良落語』の中で「小言幸兵衛」という落語を書いている記事があり、非常に短い期間で実務をやっていることがうかがえます。私などは何年もかかりましたが、この時代の速記者は1年もたたないのに実務をやっております。若林珪蔵は卒業2カ月で実務をしたようで、どこまで書けたのか、ちょっと信用しかねるほどです。

いろいろあって、山田は丸山の「関西速記社」で助手として速記教授や講談速記などの仕事をし、明治24年、私はYMCA絡みのボランティア団体に関係していますので取り上げるんですが、19歳のとき、写真の土佐堀青年会館、今の大阪YMCAですが、これは江之子島の大阪府庁舎に次ぐ有名な建物です。そこで、本間重義という牧師、二代目のYMCA館長だった人ですが、この人に頼まれて<sup>はいしょう</sup>廃娼演説会の速記をし、雑誌に掲載されます。これが大阪初の講演速記です。これがきっかけで、講演関係の速記を多く手掛けるようになり、後に「講談の丸山、講演の山田」と称されます。

そして明治27年11月、本間牧師の縁で、YMCAに関係の深い<sup>ばいか</sup>梅花女学校に新設された速記科の指導を週1回担当します。22歳の山田にとって、うら若き女学生を相手にさぞドキドキしたのではないかと思います。最初はいっぱいだった生徒も減っていき、1年で終わってしまいました。

そうこうするうち、明治29年6月、24歳のときに臨時大阪府会で初めて速記をやりますが、年表に網掛けした部分は山田の女性問題を取り上げています。時間があれば後でお話したいと思います。

明治32年、大阪府会臨時会で速記による議事録作成が始まり、丸山平次郎とともに常任速記者になります。ただ、1年に1回ぐらいしか議会はなく、時間もたっぷりあるものですから、講演や講談の速記もこなしています。

ずっと進んで明治42年、37歳の山田は、谷本富博士の<sup>なんこう</sup>「楠公と新教育」という講演の速記をやります。この谷本博士は非常に山田をひいきにし、自分の講演本には必ず「速記者 山田都一郎」と書いてくれ、山田を「日本一の速記者だ」「何も筆を入れなくても完全に仕上げてくれる」と絶対の信頼を置いていたそうです。

その後、明治44年3月に大阪市会でも丸山とともに速記を担当します。翌4月、有名な「立川文庫」——正しくは「タツカワ」と読むんですが、立川文庫自体に「タテカワ」と振り仮名が振ってあったりして、何ともいいかげんなものだと思いますが、その第一編『一休禅師』が発行されています。このころから「書き講談」が一般的に行われます。丸山や山田らは府会や市会の速記で忙しくなるし、同じく速記本の速記をしていた井下士青も横浜市会に採用されて大阪を離れたので、いよいよ速記者は速記本の仕事からだんだん遠のき、書き講談中心に移っていきます。

大正9年2月7日には、大阪の速記開拓者であり、速記本の大立者であった丸山平次郎が流感で亡くなっています。55歳でした。まあ、昔の資料は数え年で書かれており、一つ一つ満年齢に直すのは結構大変でした。

実は、『日本速記五十年史』や『日本速記事始』でも丸山の没年を「昭和7年68歳で没」と書いてあります。南陵先生もこれらの本の間違いを幾つか指摘されていますが、これは明らかに山田都一郎の死んだときと混同しており、大阪朝日新聞の大正9年2月10日に死亡記事が出ていますので、明らかな間違いです。

そして大正12年、51歳のころですが、体調不良が続き、神経質な山田は気難しさも増していったと言われています。

最後に、昭和7年、57歳のとき、体力がどうにもなくなります。書癪を患い、現場に出てもほとんど横になっているだけで、速記者の皆さんはご存じだと思いますが、赤坂薫さんがほとんど書いていたようです。速記が書けない速記者が現場に出るなんて、さぞつらかったらうと思いますが、そんなことで故郷の福井に帰ります。とはいえ、北陸の冬は寒く、体調もよくなるわけがなく、動脈硬化症などで体を崩していきます。

そして、昭和6年に長男で大阪府警にいた周さんのところに身を寄せますが、遂に昭和7年3月24日午後8時に亡くなってしまいます。享年60歳でした。

以上が山田都一郎の生涯です。速記本についていうと、従来、丸山平次郎は474冊の講談落語速記本を書いたとされていましたが、南陵先生のご研究では534冊を書いていたということです。山田都一郎についても、159種——共同もあるので種としています——とされていましたが、南陵先生によると205冊を確認されています。とにかく、2人とも大変な量の講談落語速記本を書いていたことは間違いのないと思います。

資料2は、小説『女紋』で小田都三郎という名前で登場する山田都一郎と、今回、私の話の中心資料にした、我々の大先輩である瀬戸豊さん——今日はお嬢さんがお見えなのでしゃべりにくいんですが——の『回想・わが生の軌跡』の中の「孤愁の人」に書かれた山田都一郎の性格などを対比したものです。後でお読みいただけたらと思いますが、『女紋』の都一郎は、やせた長身で、なよなよし、ケチでしぶんちで、そして特に好色でと、もうボロクソです。「北陸人は押しなべて」好色とは、北陸人すべてが助平みたいで、ちょっと書き過ぎです。以前、福井大学でお話しする機会があったんですが、これはちょっと話せないということで、ほかの話をしました。

とはいえ、内弟子だった岡原彰さんの話では、非常にきちょうめんで、潔癖で、いわゆる大阪でいう癩性病みというような性格について、そんなものだろうと言われています。ただ、これを速記者としてみると、仕事ではそれが幸いしているというか、私のようにいい加減ではなく、きちょうめんで、現場から帰ると必ず原文帳を下読みし、まっ黒になるぐらい修文し、削除や置きかえなど整文をきっちりし

て完璧な原稿に仕上げ、しかも締め切りは厳守したそうです。速記者としては最高の仕事ぶりで、谷本博士が全幅の信頼を置いたのもうなずける話です。

『女紋』では、日吉屋お敬が玉田玉秀齋を売り出して真打にしようと考えて山田都一郎の速記を利用し、政略結婚で無理やり娘を結婚させ、大変な美人だった寧にぞっこんの都一郎がストーカーまがいのことをしたように書いています。また、「横をむいてのひとり笑い。うす気味のわるい人だった」とも言っていますが、これは、速記符号などを日常考えているうちに「あっ、こう書いたらいいんだ」とひらめいて、都一郎からすれば「にこっ」と笑うことだってあったはずです。それが、『女紋』の側からは「にやっ」と笑うということなんじゃないかと思います。

時間がオーバーして申しわけありません。非常に突っ走り、わかりにくい話になったかと思います。その非難は甘んじて受けます。レジュメをお読みいただいたら大体おわかりになると思いますので、以上で私の話を終わらせていただきます。(拍手)

~~~~~

○司会（小原勉） 三牧さん、ありがとうございました。

これで予定の講演を終わり、続いて討論に移りたいと思いますが、5分間ほど小休憩をとりたいと思います。

※別紙「配布レジュメ挿入」

【討 論】

○司会（小原 勉） それでは、本日ご参加の皆様方との討論に移りたいと思います。氏名、所属などをお名乗りいただいた後、ご発言ください。

討論の前に、山下泰平さんは講談速記本を愛好されているそうですが、速記本に興味を持たれたいきさつなどをお聞かせいただけますか。

○山下泰平 もともと僕は明治の文学みたいなのが好きだったんですけども、実際に読むと余りおもしろくないんですね、明治時代の文豪と呼ばれている人の小説なんか。で、この当時の人は何を読んでいたのかというのは、調べていくうちに講談本にたどりついたという感じです。

実は、隣で編集作業をしなければならないので失礼します。以上です（笑）。

○兼子次生 山下さんは、去年の12月から（株）スタジオジブリの「熱風」で講談速記本について連載されております。講談本を非常に楽しんでいらっしゃる様子がよく伝わってきますので、なぜ講談速記本に魅せられて一生懸命読まれたのか、またこういう連載を書くに至ったのかをお聞きしたいと思うんです。この情報は大阪大学の岡島先生からいただき、あわてて「熱風」を探したんですが、その当時は最初の記事は読めなくて、出版会社にお願いしてコピーを入手したいいきさつがございます。

そこで、講談速記本はなぜ楽しいんですか、という質問を私は投げかけます。

○山下泰平 自分がおもしろいと思うものを見たいだとか、そういうものに従っていくと、講談速記本に限らず関心を持ったというか……それだけです。

（「越の海勇蔵」の電子本編集のため早々に退席）

○兼子次生 ご本名は岩下といい、山下のペンネームで原稿を書いていらっしゃいますが、隣の部屋で、第1部で大堀さんが速記された南陵先生の講談を本にまとめる作業をされています。でき次第、山下さんが書籍——PDFにして東京にメールで送り、日本速記協会のホームページに、できれば5時までにアップロードしたいと考えています。128年前、圓朝の落語を速記して本になったのは次の週の土曜日だったんですが、今日、ITのおかげで即日に本が出せる、そういうチャレンジです。

お忙しくて十分にお話をいただけなかったようですが、これから討論に入っていきたいと思います。先ほどの講演などを聞かれて、ご感想、ご質問などがあれば、どうぞご発言ください。

話のきっかけとして、ジブリの「熱風」をご紹介いただいた大阪大学の岡島先生、一言お願いします。

○岡島昭浩 私は日本語の歴史を研究しております。速記本などは明治以降の日本語の姿をとらえるのに大変有効な資料であり、以前から着目していました。山下さんの「熱風」の記事はうちの学生が教えてくれ、兼子さんにご連絡したものです。

そんな楽屋裏の話はさておき、きょうは各講師のおもしろい話を伺いました。細かい点でお伺いしたいことはたくさんありますが、1つだけ、南陵先生の話にもあったように、速記本以前から日本語の文章の中で、会話文のような形のものであったらろうと。確かにそうだと思うんですが、速記本以前に、文語体のものと会話を中心とした口語体のものがどこかでドッキングするところがあって、そこに速記がかかわっているんだらう、そのあたりが二葉亭四迷の談話なんかに出ていると思います。その辺、会話だけではない、いわゆる地の文が口語になる流れが速記術と言文一致を結んでいくことに

なるんじゃないかと思うんですが、何かお考えがあれば伺いたいと思います。

○旭堂南陵 きょう持ってはこなかったんですが、中村福助という役者が書いた、お芝居のストーリーの本があるんですね。これなんかも速記以前の言文一致というか。だから、丹念にお芝居の台詞集などに当たってみると、言文一致になっていく橋掛かりのような作品はかなり出てくるかなとは思いますが。僕はそこは専門やなく、講談速記本が出る前のちょっと参考になるものを2、3古本市で買っている程度ですが、丹念に当たるとかなりの作品が出てくるやろうなという思いがしています。

○岡島昭浩 台本なども絡んでくるとと思いますが、ト書き部分に口語的なものが出てくるのは果たしていつごろか。講談などを本にするときに文語体にするという棲み分けがあったのが、速記術の登場によって合流してくるのじゃないかと、ちゃんと調べたわけじゃないけれども感じています。その辺をお調べいただいたら、我々日本語の研究をしている者にしても大変ありがたいと思っています。

○兼子次生 言文一致運動の流れの把握を速記という技術の歴史の中でも裏打ちしていくような研究テーマが、そこに出てくる感じがしますね。

○三牧 勉 私は今月28日に盛岡で言文一致の話もしますが、ちょっと誤解があるのは、坪内逍遙が『怪談牡丹燈籠』に序文を書き、その縁で二葉亭四迷が相談したときに「圓朝のように書いてみたらどうか」と助言し、そこから『浮雲』の言文一致体が完成するわけです。

ただ、余り触れられていないのは、逍遙の『小説神髓』を読まれたらわかりますが、逍遙は、圓朝の癖は、俚言俗言というか、下町の下等な人のしゃべり言葉をそのまま書いている、これは小説ではないという言い方もしています。小説は芸術・美術だから、中等以上の品のある言葉を使って書くべきだとも言っていますので、『怪談牡丹燈籠』の文体が言文一致運動のきっかけにはなっていますが、圓朝の言葉遣いがすべて正しい、最高だと言っているわけではない。この点は少しくぎを刺しておかなければいけないという気がしますね。

○兼子次生 話がちょっとそれますが、10月28日は日本の速記が生まれて130年目のめでたい日に当たります。その関連行事としてきょうの会合を開いているわけですが、27日には東京でリアルタイムの速記競技会と高速度競技会を開きます。腕に自信のある方はぜひご参加ください。28日の「速記記念日」には、震災地を元気づけるという思いを込めて、岩手県盛岡市の「先人記念館」で速記講習とか講演会を開きます。

その責任者で衆議院速記者の前野貴子さんがお見えですので、簡単に盛岡のイベントのご紹介をお願いします。

○前野貴子 皆さん、こんにちは。一番後ろに座っている前野です（笑）。

今回のご講演、とても有意義だったんですが、わからないものは書けないとよく言われますように、一生懸命速記してみましたが、わからないことばかりで、全然書けませんでした。でも、とても役に立ったお話でした。

きょうもはがき大のチラシをお配りしましたが、10月28日に盛岡市の先人記念館でイベントをやらせていただくことになりました。私がふと思いついて、岩手の関係者に「先人記念館を借りられないかな」と話したことから始まって開催することになったもので、現在その準備をしています。当日は、兼子さん、三牧さん、小谷さんに来ていただいて講演やお話をさせていただくとともに、簡単な展示などもやり、あと、せっかくだから速記を書くイベントもやりたいと思っています。

大阪からだときりぎり日帰りできるそうです（笑）。少し厳しいかなとは思いますが、みなさん、盛

岡——東北にお友達がいらっしゃる方は、ぜひお知らせいただきたいと思っています。よろしくお願いします。

この会場に、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」を中央から外に向かって10方式の速記符号で書いたポスターを張らせていただいています。

また、先週の産経新聞に載った速記符号も私が書いたもので、原版を後ろに張らせてもらっていますので、よかったら後でござんください（拍手）。

○兼子次生 それでは、きょうのお話で疑問等を持たれた方、遠慮なくご発言ください。感想でも結構です。

○山口美知代 京都府立大学で英語学を研究している山口です。

南陵先生のお話の中でおもしろいと思ったのは、講談落語速記本と言われながらもだんだんオリジナルなものになっていったというお話です。私はイギリスのピットマンを研究しているながら、自分では速記が書けないのでよくわからないんですが、「速記」とは何なのかという根源的なことを教えてください。講談のオリジナルがあつて、それを聞いて速記符号で記したときに初めて「速記」と言うのか、それとも、もともと速記者がオリジナルな本を出すときに、速記符号でとりあえず原稿を書いていくのか。オリジナルというのは、普通に漢字とか平仮名で書いた場合、そこには速記は入らないのか。

また、自分の考えを速記記号で書いた場合に、それも速記と呼べるのでしょうか。例えば、イギリスというかアイルランドのバーナード・ショーという作家は速記で書いたと言われるんですが、それもいわゆる「速記」と呼べるのか、それとも単なる暗号なのか、まとまりがつかないんですが、ご教示ください。

○兼子次生 関山先生、本のカテゴリーをどう理解したらいいのでしょうか。速記本と書き講談本の違いだとか、何か定義的なことがあれば……。

○関山真理子 一応、速記者が絡んでいるものに関しては「速記本」と言えると思います。速記自体を介さないもの、これがオリジナルな「講談本」ということなのではないかと思います。実際、速記の符号を使って書いたかどうかというところまで完璧にすべてを把握できるかどうかは、私にはわかりません。

○旭堂南陵 いわゆる書き講談もひっくるめて、ジャンルとしては「速記本」と言っています。古本屋もそう言っていますね。最初は、演者の家や寄席で書いていたんですが、速記者もだんだんわかってきて「これやったら、粗筋を聞いて家で書いてしまおう」とか。だから、混在しています。初期の時点には一言半句きっちりとやってただろう。

これはね、読んだらわかるんです。この講談師・落語家の口調がある程度出ているなというのは、完全に「あ、速記者が演者の名義だけ借りて書いてるな」というのは、たくさんの速記本を読んでいくとわかってきます。でも、書き講談も全部ひっくるめて「速記本」というジャンルでひとくくりに行っているのが実態です。

○関山真理子 逆に質問ですが、バーナード・ショーが速記を介していたというのは、ほんとに符号的な速記でやっていたのか、それとも単純に「速書き」みたいなもので書いていたのでしょうか。

○山口美知代 バーナード・ショーはピットマン式を使っていたらしいです。速記的な表音文字がアルファベットにとってかわったら、もっと早く書けるようになり、私も3倍くらい早く書けたのと思

います。でも、ショーのことなので、どこまで早く書けたか、かなり割り引いていいかとも感じます。

○兼子次生 チャールズ・ディケンズも速記をやっていて、食えない時代には速記者として働いたと聞かれています。イギリスで速記のルネサンスが始まったのは1588年からで、多くの知的能力の高い方たちは速記を覚え、自分の取材とか原稿書きなどに役立てています。オーストリアのシュンペーターも速記が書けました。彼の著作の多くは速記で草稿——アイデアを書き、本にまとめていったと聞かれています。欧米では一時、インテリのたしなみのような形で速記が使われた時代がございました。

補足ですが、松本清張の小説を速記したのが福岡隆という人で、清張さんは非常に忙しいものですから、福岡さんが口述速記をすることで助けてくれました。また、福沢諭吉が『西洋事情』を書くときにも、速記者を使いました。最初の口述速記は、矢野文雄（龍溪）の『経国美談』後編で、これも矢野の口述を若林珪蔵が速記しまとめた本です。

そのような著作物の口述については、余り速記本とは称してはいません。なぜか講談落語についてのみ「速記本」という言葉が使われていることを補足します。

○三牧 勉 先ほど南陵先生も「演芸速記本」とおっしゃいました。これは、先生のお仕事の講談とともに落語があるんですが、もう一つ、浪曲もあるんですね。実際、浪曲には速記者が余り介在していませんが、その3つの、いわゆる高座で演じるものを速記して本にしたのが「速記本」と総称できる。

ただ、若林が最初に書いたときは「若林珪蔵速記」という用語を使っていません。演者も「講演」「講演」「演述」「口述」と、いろんな書き方をしています。速記者のほうも、「速記」をいう場合もあるし、「筆記」がわりと多い。若林はほとんど「筆記」で、私なんか、よほど速記の腕に自信がなかったのかなと思ったんですが、東京の講談本で活躍した酒井昇造や小相英太郎なんかは、大体「速記」を使っています。その点では非常に線が引きにくいんじゃないかと思います。

「立川文庫」の山田酔神などは、皆「速記」と書いていますが、速記が全く書けない人たちです。強いて言えば、山田都一郎と同じ山田姓だから、「山田酔神速記」とすれば、都一郎を連想して売れると思ったのかなと、私は邪推したりもしましたが、非常に曖昧なんですね。

だから、速記者が書いたものとそうでないものを厳密に分けることは、多分南陵先生でもできないんじゃないかと思います。それができたら研究も一気に進むんですがね。

○兼子次生 いろいろな話題を出していただいて、速記に関係する文化の理解を深めたいと思います。何でも結構です、ご発言をお願いします。

河原先生、お願いします。

○河原達也 京都大学の河原です。

私は工学専門で、素人質問しかできないんですが、南陵先生の話に関係して、特に古典落語の場合、昔からの台本があって、それを落語家がおもしろおかしく話し、それを速記者が書く、それが速記本だと認識したんです。そうすると、素朴な疑問として、もとの台本と速記本でどれくらいの違いがあるのか。もちろん、工学的に何%というように出すのは難しいと思いますが（笑）、主観的に見てどうでしょうか。

なぜこういう質問をするかという、昔は著作権がなかったと言われましたが、もし著作権という概念があったらどうなんだろう、速記本に著作権が認められたかということなんです。

○兼子次生 明治のそのころ、著作権はあったんでしょうか。

○河原達也 いや、ないと思いますが、もしあったとしたらということで……。

○旭堂南陵 そのかわりになるのが「版權」です。一義的には、当時の出版権は講演者が持ちますが、講演者から速記者が買い取って持ち、それを買い取るのが出版社です。だから、出版社がさんざんもうるシステムでしかありません。個人に著作権はまずない。

○河原達也 それは了解しているんですが、もし今の著作権の概念が適用されたらどうだったろうか、という観点で質問したんです。

○旭堂南陵 桂三枝さんの創作落語は三枝さんが権利を持っていて、必ず「三枝作」としなければなりません。今は桂文枝ですが、どうデフォルメしようと、原型がある以上は文枝作なんです。著作権をとらなくても、発表した段階で著作権は生じます。しかし、金は請求しませんね。私も大抵つくりましたが、皆勝手にやってますわ（笑）。

しかし、じゃあ台本どおりやっているかというのと、きょうの「越の海勇蔵」でも、10分に縮めなあんから、あっちを削りこっちを削りで、その時々で違います。

だって、速記本なんて、そんなに古いものじゃないんです。本屋には「米朝全集」が並んでるじゃないですか。一緒です。

○兼子次生 深澤先生、何かお感じになったことがあればお願いします。

○深澤 愛 近畿大学の深澤と申します。私も日本語の歴史に興味を持って勉強しているんですが、すごく素朴な質問をさせてください。

どなたかの話で、若林珪蔵が速記術を習って2カ月ぐらいで実務をしたということですが、実際に速記をなさっている今の速記者の感覚からすると、そんな短期間の練習で本当に速記できたのかどうかという点はどうなのでしょう。

○三牧 勉 ちょっと無責任な言い方をしましたが、実は明治15年10月28日に田鎖が第1回の講習会を6カ月間開きまして、翌年5月5日に第1回の卒業生が出て、若林以下17名と言ったり24名と言ったりしますが、その中で速記を業とするのは4人なんです。5月5日に修了証書をもらった時点で、基本文字を習っただけで誰一人書けなかったとみずから言っているんです。そこで、実用化するために、若林の家に7、8人が集まって練習をし、改良を加えて、書けるように工夫したと言われています。

同時に、5月5日に卒業し、7月に自由新聞のでっち上げ記事の問答の速記を郵便報知新聞にから若林が頼まれ、自由新聞の応接室に行き行って書いたのが報知の新聞に載ったんです。だから私は、2カ月後に実務をしたってほんまかいなと思ったわけです。

ただ、正直いって、彼らは文才があるんですね、もともと。若林にしろ、林茂淳にしろ、書記官の経験があるんです。また、当時の記録はほとんど文語体に直して出すんですね。このときの記事も文語体ですし、埼玉県会で速記を初めて採用したときも、速記はしていますが、つくった記録は文語体なんです。当時の正式な文書はすべて文語体だから、きっちりすべてを速記しなくてもいいだろうし、『怪談牡丹燈籠』にしても、後日談によれば、まあ何とかいけるんじゃないかということで書いたとも言っています。そして、報知新聞の記者に手を加えてもらったり、東京稗史出版社の本がつい最近も出ましたが、その中でも手を加えて出版したといったことが述べられています。

だから、我々と違って、昔の先輩速記者にはいわゆる小説家崩れとか詩人崩れとか、作家を志したのが売れなくて速記をやったという人が結構いますから、自分で文章をつくる能力はあるんです。その点では、100%書けなくても、何回か行って聞いていれば粗筋もわかるし、それで書いたということはなきにしもあらずだと思います。

『怪談牡丹燈籠』自体、明治 17 年 7 月——卒業後 1 年 2 カ月で刊行されていますから、その意味では、若林は速記者の中でも、非常にプロデュースがうまいというか、宣伝がうまい。ある意味では速記者らしからぬ速記者だったと、私は思っています。酒井昇造はまじめで、『怪談牡丹燈籠』のときも、酒井の後日談では、若林は 2、3 回欠席したが、自分は全部出て書いたと言っており、酒井の方はそこそこ書けていたんじゃないか。若林は適当……と言うと本人からお叱りを受けるかもしれませんが、私はそのように感じています。

同時に、現在は録音があるから、言ったとおりの 100%が要求されるんですね。しかし、昔は言ったとおりというよりも、読めるように書く——私が先ほど山田都一郎の講演速記の話をしましたが、山田は、現場から帰ったら原文帳を一回読んで、まっ黒になるほど手直しをして、その上でちゃんとした文章にして原稿を納めたそうで、それが講演者の感覚と一致し、「速記は山田に限る」「山田は日本一の速記者だ」と言わしめた。だから、今でいう会議録的な逐語訳といった書き方はしていない、それが逆によかったんじゃないか。今は録音があるから、悪く言えばバレちゃうんですね。

だから、おっしゃるように、最初の時代、きっちり速記していたとは私も思いません。

○**深澤 愛** 単純な興味で伺いますが、明治の当初は厳密に発言をそのまま写し取るというのではおそらくなかったとして、もし今の会議録のように、厳密に録音と比較されるような速記技術を身に着けるにはどのくらいかかるんでしょうか。

○**兼子次生** 個人差もあるし、非常に難しいですね。かつて日本は衆議院と参議院、そして最高裁判所に速記者養成の機関があり、世界にもない、非常に日本は速記大国だったわけですが、その修業年限は 2 年だったと思います。早い方は 1 年半ぐらいで最高技術レベルに到達します。1 日に 5~8 間ぐらい練習する。一般に 1, 0 0 0 時間の練習で最高レベルに到達するという、「1, 0 0 0 時間説」ということも言われましたが、民間の速記学校でも、早ければ 1 年半ぐらいで一番上のレベルに到達する方がいらっしゃいます。

それとは別な次元でいうと、言葉に対して非常にすぐれたセンスを持った方は、符号が早く書けなくても、日本語の高い理解力でちゃんとした原稿が書けるという面もあります。その点では、若林珪蔵は埼玉県会で文語体の議事録を書いており、その経験を踏まえて速記を習ったので、日本語の能力が格段に高かった。それは、後に貴族院の速記者になる林茂淳も元老院の書記でしたから、多分同じだと思います。そのように、完全な記録ができる力を持った人が田鎖綱紀の門をたたいたわけですから、問題点も理解し、ボキャブラリーや文法、話し言葉や書き言葉のあしらい方など、普通の人よりもずっとレベルが高かったと思うんです。

○**前野貴子** 速記協会の 1 級レベルでいうと、衆議院の養成所の優秀な人はおそらく 2 年生の最初ぐらい、つまり 1 年ぐらいで分速 320 字に達すると思います。

今、盛岡でのイベントの準備でいろいろ本を読んでいるんですが、例えば伊藤博文内閣総理大臣は 10 分間で 1,145 字、早い人でも 3,000 字ということで、昔は話速がゆっくりだったそうです。伊藤博文が 1 分間 120 字弱だとすると、私が養成所で分速 120 字を書いたのは 1 年生の 9 月ごろだと思うので、そんなにかからないと言えます。ただ、速記がもっと実用化し、完全な技術として確立した現在のことなので、2 か月で書けるというわけじゃないですね。

○**兼子次生** 日本速記協会では小谷征勝理事が「みんなの速記運動」を担当していらっしゃいます。速記を普及したいという活動です。速記にご関心のある方は小谷さんに連絡を取っていただきますと、

相談に乗ってくれますし、場合によっては指導に赴くこともできるかと思います。

○小谷征勝 協会で「みんなの速記推進活動」をやっており、その担当理事を務めています。京阪神では大阪、神戸で行っており、今まではプロを養成する指導が中心でしたが、現在は一般のできるだけ多くの人が速記を利用できるように、ということでやっています。協会のホームページにも出ていますので、一度ごらんいただいて、速記をやってみようかなと思われる方はぜひお声かけください。

○三牧 勉 1点だけ追加させてください。

例のオレンジ色に網掛けした、山田都一郎の女関係の話、時間の関係で割愛しました。ほんとはそれが一番おもしろいので、補足的にさっとお話しします。

ざっと見て、山田都一郎は4人の女の人と関係があり、結婚届を出したかと思ったら2カ月ぐらいで別れたり、またよりを戻したりとか……その意味ではちょっと問題のあった人かなと思います。長女が生まれたのに認知もしないで実家に帰らせたり、認知請求されたら仕方なく入籍し、ちょっとしたらまた別れる。最後の奥さんはヨシエさんというんですが、この方とも別れたり、また一緒になったりと、結構ガタガタしています。この辺のことは後でお読みいただいたら、何となく察せられるんじゃないかと思います。

○司会（小原 勉） それでは、本日の速記130周年記念シンポジウムはこれにて終了いたします。ありがとうございました。（拍手）

~~~~~

（5時30分から懇親会）